

## 儒林外史における諷刺の基底をなせるもの

飯 田 吉 郎

「吳敬梓の『儒林外史』が出るに及んで、乃ち公心によつて時弊を指摘し、機鋒の向ふところは特に士階級にあつた。その文はまた慷慨でも諧謔に富み、婉曲にして而も諷刺が多かつた。かくて小説中に始めて諷刺の書と称するに足るものが出たのである。」とは、「儒林外史」の最もすぐれた注釈者である魯迅の言葉である(註一)。が、凡そ諷刺は直接表現が社会的に拒まれてゐる——いはゞ齒に布をきせぬ正面攻撃が許されない時に、形を他に借りて、その下から刺すのが、諷刺の社会的機能であらう。

けれど、作者、吳敬梓(一七〇一—一七五四)の時代は、胡適によれば(註二)、康熙大帝逝りし後、乾隆大帝未だしの過渡期であり、清朝第一期の大儒、毛奇齡を始め、顧炎武、黃宗羲、閻若璩、胡渭など、更に尤侗、朱彝尊、王士禛の文人に至るまで、すべて逝りし、所謂「青黃不接」の時代であり、八股文の最も盛大な時期であつた。そこには形式主義の八股文を盲信し、聖賢の假面に彩られた偽善的な士階級が割拠した。かゝる八股社会に、科挙を足場として、功名富貴の四文字を貪る士階級を主とし、官僚、豪紳、儒者、名士、商人、百姓、俠客、仙者、僧官、女、役者、占者など、およそ三百余人のあらゆる階級の人物を擱へて来て、彼等の無智、無能、狡猾、貧欲、不正虚偽などの現実の色彩を最も鋭敏に捉へて非難、攻撃したのが、「儒林外史」である。

本稿はかゝる諷刺文学としての「儒林外史」の諷刺の様相の一端を覗きつゝ、作者、吳敬梓の現実への批判精神の立場乃至支柱について管見して見たい。

まづ、科挙が如何に儒者たちにとり、熾烈なる欲求の対象であつたかを、范進の場合に例を見よう。范進は受験名簿には三十才と書かれ、実は五十四才の、しかも二十数回落第の老童生であるが、幸に無能な周学道のお目にとまり拾ひ上げられる。その様は、

見おはると、思はず歎息して云つた、こんな答案は、俺でさへ二度看ても分らなかつたが、三遍つゞけて読んでみて、やつと天地の名文である通也不能解。直到三遍之後、才曉得是天地間之至文！真乃一字一字が珠玉の名文、世間のでたらめな試験官が、どれほど多くの俊才を泣かして来たか分らない。

試験官、不知屈煞了多少英才！(第三回)

二度目にやつと天地の名文であると判定された八股文のしるものもさることながら、世間の試験官を糊塗呼ばりする周学道の無知も甚しい。

さて、合格の報を聞いた范進が、

見なければよいものの、一度みては、また一度読むと、自分で両手を一拍看便罷、看了一遍、又念一遍、自己把兩手拍

度叩き、ハハ……と笑ひ、「お、好かつた、わしは合格したんだ」と云ひ  
了一下、笑了一聲道、「噫！好！了！了！我中！了！」

ながら後へばつたりぶつ倒れ、上下の歯を喰ひしぱり、人事不省となつ  
着往後一交、跌倒、倒、牙、闕、咬、緊、不、醒、人

た。母親は慌てて、急いで湯を数回顔に濯ぎかけると、范進は這ひ上り、  
事。老太太慌了、忙將幾口開水灌了過來。他爬將起來、

また手を叩きハハ……と笑ひ、「お！好かつた！わしは合格したんだ！」  
又拍着手大笑道、「噫！好！了！了！我中！了！」

と笑ひながら人の言葉に耳もかかずに、表に飛び出したので、通報人と  
笑、着、不、由、分、說、就、往、門、外、飛、跑、把、報

隣家の者たちはみなびつくりした。  
録、人、和、鄰、居、都、嚇、了、一、跳。(第三回)

と、合格の喜びに発狂してしまふのは、作者の誇張的表現による科挙  
への憎しみであらう。やがて、范進をとりまく周囲の人たちの中には

果して多くの人たちが御機嫌伺ひにやつて来た。田地を送る者もあり、  
果然有許多人來奉承他。有送田產的。

みせを送るものもある。また落ちぶれた者たちで、夫婦でやつて来て、  
有人送店房的。還有那些破落戶。兩口子來

身売りにして下僕となり、庇護をもとめる者もあつた。  
投身為僕。因蔭庇的。(第三回)

と作者は范進人に寄生虫のごとくまといつく民衆の愚劣さを嘲笑する。  
このような科挙よりのし上つた官吏の無能さを湯果知事の場合に見

よう。回教徒に「牛肉禁止令」が下り、さる回教和尚が、牛肉五十斤  
を用意して嘆願に来る。湯果知事は張郷紳に相談すると、

愚見に依れば、あなたはこの事件で有名になられます。今夜彼を伺候さ  
依小姪愚見、世叔就在這事上出個大名。今晚叫他伺

せ、明日午前の法廷へ、その和尚を連れて参り、二三十回杖刑を加へて  
候、明日早堂、將這老師夫拿進、打他幾十回板子

大きい首枷を取つてはめ、枷の上へ牛肉をつんで、傍に一枚告示を出し  
取一面大枷枷了、把牛肉推在枷上、出一張告示在傍

奴の大胆な点を声明しますれば、上司が聞き出し、あなたに一点の不都  
聲明他大膽之處、上司訪知見世

合のない所が分れば、直ぐにも御榮転です。  
一絲不苟、陞遷就在指日。(第四回)

と教へられた湯果知事は、翌日の法廷で、最初の公判である鶏泥棒の  
常習犯の刑罰に、ついで回教和尚の刑罰にこの方法を実行したとこ

ろ、折からの暑さのため、牛肉に蛆が湧き、和尚は三日目に悲鳴を上  
げ死んでしまつた。まこと湯果知事の愚直と無能を諷刺したものであ

るが、更に官吏たちの金銭への貪欲さも又甚しい。新任の南昌王府知  
事が、事務引継の折、旧任の遷太守の公子と交す対話をみよう。

王太守はそろそろ問ひかけた、土地の人情はどうですか？、それに何  
王太守慢慢問道、「地方人情？、可還

か収入でもありますか？、訴訟の中には少しは袖の下のものであり  
有甚麼出產？詞訟裏可也略有甚

ますかな？  
麼通融？」

とか、  
三年真面目に府知事をやりや、白銀十萬兩の役徳があるといふ話も、今ぢ  
可見三年清知府、十萬雪花銀的話、而

や余り当てもならんかね？  
今也不甚確了。

と、問へば、あひにく旧任の遷太守は清廉であり、旧任の按察使から  
も、「君んとこの府署ぢや三種類の聲がするさうだな。」と云はれた

と答へる。と  
王太守が云ふ、「その三種類と云ふと？」

王太守道「是那三種？」

公子が答へる、「詩吟の聲と、将棋をさす声と、小唄の聲です。」

遷公子道「是吟詩聲、下棋聲、唱曲聲」

王太守腹を抱へて云ふ、その三種類といふやつあ、えらう面白いもんで  
王太守大笑道、這三種聲息、却也有趣的

すな。  
遷公子云ふ、「これからはあなたさまも一つ頭張りなされて、他の三種  
遷公子道一將來老先生一番振作、只怕

類の音に換へられやしませんか。」  
要三 様 聲 息

王太守云ふ、「どんな三種類に？」  
王太守道「是 那 三 様？」

藤公子答へる、「秤を掛ける音、算盤の音、答刑の音です」  
藤公子道「是 戱 子 聲、算盤聲、板 子 聲」（第八回）

と、作者は王太守を通して、官吏の狡猾と貧欲について、ユーモアを伴ひつゝ、諷刺の辛辣を極めておる。が、この諷刺より流れる笑ひが、単なる愚ふざけに終らず、やがて笑を凍らせるものを持つておること、又清廉な官吏を狡猾な官吏に対比せしめる手法は、単に狡猾な官吏を強調するためのものでなく、何よりも作者が人間への信頼——愛をも忘れていない証左であり、諷刺文学としての「儒林外史」の特質に思はれる。

これらは、何れも科挙による官僚の典型的な無智、無能、貧欲などを見てきたが、更に科挙による礼教の腐敗を見逃すことは出来ない。例へば、倪老秀才が三十七年間も秀才をやり、あたら科挙にしくじつたが為、今は樂器修理屋を営み、貧乏の果、六人の子供のうち、一人は死に、他は皆売らねばならなかつた話（第二十五回）。又、王玉禪の娘が夫に殉じようとする場面において、父、王玉禪が、

ねえ！おまへがさうするんだつたら、そりや青史に名を留めるといふも  
我兒！你 既 如 此、這 是 青 史 上 留 名  
んじや。わしはおまへをとめやせんよ。おまへの考へ通りにやりやい  
の 事。我 難 道 反 攔 阻 你？ 你 竟 是 這 樣 做  
よ。  
罷」

と、「青史留名」の四文字をかざして、平然と娘の殉死を見送る王老秀才の話（第四十八回）など、まことに笑ひの涙の凍る話の中に、作者は人間性を虐殺する礼教を厳しく憎悪する。

しかし、これら形式を主とし、聖賢の道を假裝する科挙を足場とし、徒らに功名富貴を貪る儒者群に対して、一応白眼を投げつけ、俗世間

から離れ、文芸に優遊する一団の人達がいた。その中心人物は、作者吳敬梓のモデル（註三）と言はれる杜少卿である。高先生の言葉（第三十四回）を借りると、杜家は累代の名門で、近くは、杜少卿の父は進士を経て太守に任ぜられたが、全くの奇人で、官吏となつても、上司を敬ふことを知らず、ひたすら百姓を語り友とし、「敦孝悌、劬農柔」の馬鹿話ばかりしておるとの理由で、遂に上司の怒りに觸れ、太守の官を台無しにしてしまつたと云ふが、この父を持つ杜少卿の人物は、再び高先生の言葉を借りると、

杜さんの息子と来たたら、もつとでたらめやで、穿ほうだい食ひほうだい  
他 這 兒 子 就 更 胡 說、混 穿  
で、和尚、道士、職人、乞食と誰でも引張り出して仲間になり、決して一  
吃、和尚、道士、工匠、花 子 都 拉 着 相 與、却 不  
人のまともな人とさへ仲間にならうとせんから、十年も経たんうちに、六  
肯 相 與 一 個 正 經 人。不 到 十 年 内、把 六  
七 万 の かね を す つ か ら か ん に 費 ひ こ み、天 長 県 に は 安 住 も 出 来 ず、南 京 城  
七 萬 銀 子 弄 的 精 光、天 長 県 站 不 住、搬 在  
内 に 引 越 し た は よ い が、毎 日 女 房 を 連 れ だ つ て 酒 場 で 酒 を くら ひ、手 裏  
南 京 城 裏、日 日 携 着 乃 眷 上 酒 館 吃 酒、手 裏  
銅 の 盃 一 つ 持 ち、ま る で 乞 食 同 様 ぢ ゃ！杜 さん の 家 に も つ い に あ ん な 道  
拿 着 一 個 銅 盞 子、就 像 討 飯 的 一 般！不 想 他 家 竟 出  
了 這 樣 子 弟！（第三十四回）

とある如く、全く功名富貴を外にしての豪傑肌であり、風流人である。（この杜少卿の生活については、作者は第三十一回より第五十三回と十六回の長きに亘り筆を尽している。）ことに、巡撫部院の奉大人より官吏に推薦された折には、俺の叔父の光によつての推挙とばかりにはねつけ、病を装うて、官に做かず、敵として風流、豪傑の浪漫な生活をつづける。が、これほどの風流、豪傑にして、俗世間を離れた文人の典型と見なされる杜少卿にも、やはり科挙への甘き夢は完全なまでに忘却し難かつたらしい。即ち、巡撫部院よりの推薦を拒否し

た後で、彼は次のように述懐をもらしている。

よし！ わしは秀才となり、こうした結果になつたからには、これから好了、我做秀才、有了這一場結局、將來先鄉試にも受験せず、科擧にも受験せずに、氣まゝに暮して、自分のや郷試也不應、科擧也不考、逍遙自在、做些りた、事をやらうぞ！  
自己的事罷！（第三十四回）

この杜少卿なる一文人を通しての科擧への一片の夢は、一つには、当時の文人と雖も、文人としての独立は不可能に近かつたことを予想させ、二つには、文人もやはり、科擧をかざす儒者たちと反目しながらも、彼等は彼等なりの科擧による賢人政治を夢想したようにも考へられる。されば、杜少卿の知己、遲衡山が、秦伯祭祠（註四）を勧めて、

今の読書の朋友たちは、たゞ八股文を講ずるだけで、二つや三つの詩而今讀書の朋友、只不過講個擧業、若會做賊がつくれさへもれば、もうえらう高尚だと思ひこみ、經史上の礼樂兩句詩賦、就算雅極的、了、放蕩、兵農のことなどすて去つて、とんと見向きもせぬ。

と云ひ、又、  
兵農のことなどすて去つて、とんと見向きもせぬ。（第三十三回）

われわれのこの南京で、古今第一の賢人は吳泰伯である、  
我門這南京、古今第一個賢人是吳泰伯、……蓋一祠を建て、春秋の仲の月には、古の礼樂で祭を行ひ、これにより、所秦伯祠、春秋、兩仲、用古禮古樂致祭、借此、大なが礼樂を習ひ、人材を育成すれど、政教を助けることもできよう。  
家習學禮樂、成就出些人材、也可也助一助政教……  
……（第三十三回）

と、云へば、杜少卿も即刻同意し、秦伯祠建立の運動を展開し、虞國子監博士を祭主として以下四十四名による盛大な祭祠が施行される。この古礼樂による吳泰伯祭祠の様子は、第三十七回の一章に互り克明に描写されて居る。が、この章こそ、「儒林外史」全篇の構成上から云つても、一つの頂点をなし、以後諷刺の興奮は次第に下降しつ

ゞけ、又内容的にみて、「儒林外史」の諷刺文学としての作者の批判精神の重要な支柱乃至基底をなすものと考へられる。即ち、狡猾、貪欲、無智、無能、不正、虚偽などの愚劣な八股社会に反抗して、何か人間の、人間らしい生活を憧憬し、追求して行つた時、彼等文人たちの辿り得た唯一の道は、吳泰伯の祭祠であり、古の礼樂を復興し、賢人を育成し、政教を助けようとする復古思想であり、儒教主義であつた。

しかし、この復古乃至儒教を基底とする王道主義による賢人政治の夢も、その完成を見る間もなく、万歴の二十三年には、南京の名士はすべて四散し、或者は死し、或者は老ひ、再び現実の社会に眼を向ける者は無くなり、作者は、「市井の中に幾人かの奇人が居るだけ」と淋しく筆を下しておる。即ち、これらの奇人と云ふのは、一人は無学だが、畫の巧みな男であり、一人は碁の巧みな紙の付け木を売る男であり、一人は財産を使い尽し、今は詩を作り、書を読み、絵をかき茶店の主人であり、最後の一人は、仕立屋だが暇に琴をひき、畫をかき詩を作る人である。

今、これら四人の奇人のうち、最後の仕立屋、荆元の言葉を借りて奇人の理解のよすがとしよう。

俺は高尚な人なんかになりたいと思はない。これも生れつき好きなものも我、也、不、是、要、做、雅、人、也、只、爲、性、情、んだから、しじゆう勉強しているだけさ。俺たちのこの商売はね、祖父相、近、故、此、時、常、學、學。至於我門這個賤行、是、が遣してくれたものです。まさか書を読んだり、字を習つたり、裁縫し祖父、留、下、來、的、難、道、讀、書、識、字、做、了、裁、縫、就、玷、汚、了、不、成、？、況、且、那、些、學、校、連中ときたら、彼等には別にお高い見識を持って、俺なんかとよう仲間中の朋友、他、們、另、有、一、番、見、識、怎、肯、和、我、們、相、與、？、而、今、每、日、尋、得、六、七、分、銀、子、吃、飽、了、飯、

琴をひくにも、字を書くにも、何でも俺の氣儘さ。それに人さまの富貴要 弾 琴、要 寫 字、諸 事 都 由 得 我。又 不 貪 困 を貪る訳ぢやなし、人さまの御氣儘を伺ふ訳ぢやなし、天にも地にも我 人的 富 貴、又 不 伺 候 人 的 顔 色、天 不 收、 一人でさ、そりや愉快なものだよ。

又、この荆元が、老友の于老者ととの会話の条に、

古人がともすると、桃源に世を避けるといふが、桃源なんぞは必要ない 古人 動 説 桃 源 避 世、我 想 起 來、那 裏 要 甚

と思ふね、たゞあなたに如く、こんなな悠々自適と、こんな城市の山林 麼 桃 源、只 如 老 參 道 樣 清 間 自 在、住 在 這 樣

とも云ふべき処に住んでおる者こそ、今の世の活神さまだよ。 城 市 山 林 的 所 在、就 是 現 在 的 活 神 了！ (第五十

五回)

と、云つておるが、この荆元裁縫師を通してみる、これら四人の市井の奇人の人性観にこそ、現世の功名富貴を外にして、正に桃源の世に帰らんとする作者の最後の理想の夢がかけられたのであらう。しかも、これら四人の人生観こそ、「儒林外史」開巻の「引端を説き、大意を敘述し、名士に寄せ、全文を隠括す」の中の主人公、王冕が、一個の水呑み百姓の小婢から、勉学をし、官吏の招聘を耳にすると共に、すばやく会稽の山中へと逃げ去つた話と、全く軌を一にするもので、この王冕と四人の奇人を結ぶ線上に、作者、吳敬梓の現実社会への反抗とその限界の足跡を鮮明にするように思はれる。即ち、作者吳敬梓の諷刺文学としての、批判精神の基底をなすものは、前述せるごとく儒教主義であり、復古的王道社会であり、更に満たされぬ現実への不満を無為自然の中に転化しようとするところに、作者、吳敬梓の批判精神の性格を見ることが出来る。尙、作者は第五十五回の最終の詞、沁園春の中で、

今はやみぬ 衣冠をぬぎすて 足を滄浪にすすがばや  
今已矣！ 把衣冠蟬蛻 濯 足 滄 浪、

と、又

今よりは やくろ、きよりもん伴ひて、われ空王をおろがまむ  
従 今 後、伴 藥 舫 經 卷、自 禮 空 王、(註五)  
と、現実より逃避して、無為自然への転化の色彩を一層濃くしておるが、とまれ、「儒林外史」の作者、吳敬梓も数千年來の中国の傳統の重荷に堪へかねて、再び中国文人の傳統の霞の中に酔ひつゞけねばならなかつたことは、一沫の郷愁をとゞめぬ。

(注)

注一 支那小説史(魯迅著・増田涉訳)第二十三篇參看。

注二 胡適・吾敬梓年譜、十九才項參看。

注三 金和儒林外史跋、及吳敬梓年譜參看。

注四 吳泰伯祭祠のことは、小説では遲衡山の勧誘によつてゐるが、このことは作者、吳敬梓の伝記と關係がある故、左に金和の跋の一部を記す。

雍正乙卯華鴻詞科、當事以先生及從兄靑然先生、堅臥不赴。客金陵、爲金山水所廬、遂移家焉。四方文酒之士、推先生爲盟主、鳩同志築先賢祠於雨花山麓、祀泰伯以下凡二百三十人、工鉅、售所居屋以成之、晚歲益窘、冬至不能具煖炭。姻戚故旧官中外者千百計、卒不一往、惟閉戶課子、禿文爲活、卒葬金陵鳳凰台門花田。

注五

「伴藥舫經卷、自礼空王」の文は詳かでない。不老長生の煉丹(修身)と仏教の経文(修心)とを伴つて、空王に礼するといふ、空王とは、果して国語辭典に説くごとく、仏の尊称の意に解してよいか些か理解に苦しむ。全回のうち、この條だけに仏が飛び出すのも些か唐突さを免れない。無為自然の全一の支配者を空王とレトリックしたままであらうかとも考へられる。